

ありふれた世界に星の白金は輝く

ユフたんマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主が承太郎に憑依して、憑依した初日に転移するお話。尚そこはジョジョの世界ではなく全くの異世界の模様。

目次

憑依	1
勇者（笑）の片鱗	10
決闘	22
奈落に煌めく白金	31
会合	40
封じられし女王	47

憑依

目が覚めたら空条承太郎だった。何を言ってるかわからないと思うが俺にもさっぱりわからない。目が覚めたら俺は空条承太郎だったのだ。過程など吹っ飛ばされ空条承太郎になったという結果だけが残っている。まさかキング・クリムゾンの能力か!?

とまあ茶番は置いといて恐らく俺は憑依したのだろう。ジョジョの奇妙な冒険という作品の中の主人公、『空条承太郎』に…いやだー、俺ジョジョの黄金の精神なんて大それたもの持ってないからすぐにDIOの追手に殺されちゃうじゃないですかー!

本来なら仰天するような事柄だが不思議と冷静でいられる。承太郎になったおかげだろうか。精神的に余裕がある。

「承太郎ー！そろそろ起きないと遅刻するわよー！」

「…ああ、わかった」

外から声をかけられ返事をする。俺はあ、今起きますと言おうとしたのだが何故か変換されてしまった。承太郎の口調フィルターでもかかっているのだろうか。きっと神からのロールプレイをしろうという導きに違いない。

襖を開けるとそこには金髪の年齢を感じさせない美女、ホリイさん。現俺の母さんが立っていた。

「あら？いつもなら起きてこないのに今日は珍しいわねえ！何かあったのかしらー！」

そう言われて思い出す。そういえば俺…というか承太郎は大体学校遅刻していたな…

「いや、今日は早く目が覚めただけだぜ」

適当に母さんの質問に答え思考する。今の奇妙な感覚…それは俺だけの記憶じゃあ知り得ないもの…それはいつもの承太郎としての記憶。それが薄らとだが俺に残っている。残っていないければ承太郎が遅刻していたと知っているはずがない。眉間に皺を寄せ思い出すと母さんが用意していた朝食を食べる。

あ、美味しいこの玉子焼き。癖になりそう。

そして思い出したのは部屋にスマホを忘れていたということだ。朝食を食べ終え、部屋に戻りスマホを手に取った瞬間、ふと頭に疑問が過ぎる。

なんで高校生の承太郎がスマホを持っていないんだ？承太郎の時代は確か携帯電話なんてものは無く、シヨルダーフォンといった携帯電話の元となったものしかなかったと思うのだが…

起動するとパスワードがかかっていたが、指紋認証で解除しカレNDERを確認する。

「2000年…を超えているだろ!？」

ジョジョの作品の正確な年代を覚えてはいないが、流石におかしなことはわかる。三部といえれば2000年以前の物語であることぐらいは知っている。この時点で既に時間軸がおかしくなっている。

いったいどういうことだつてばよ…わからん…

窓を開けて鞆から取り出したタバコで一服する。

「ふう〜……」

つて俺何吸つてんだ!?すぐさまタバコの火を消し捨てる。完全に喫煙が習慣になってたな承太郎。ヌルつていったもんヌルつて。癖だよ癖、体が覚えてたんだよ…というか喫煙してんのによくあんな動けん。流石はジョースターの血統…

そろそろ登校の時間なのでいつもの学帽を被り、承太郎が自分好みに改造した学ランを羽織り、ピアスをつけ登校する。こんなのでいけば即指導ものだが何故か先生に指導されていない。やはり不動産王であるお爺ちゃんの圧力が効いているのだろうか。まあ創作物の世界だししょうがないよね!学園ものでよくある金持ちなら問題を起こしても学校側から何も制裁を受けないようなものだね、うん。

まあそんなどうでもいいことは置いといて登校しよう。鞆を漁り生徒手帳を取り出し学校名を確認する。うん、わからん。

道筋はぼんやりとだが覚えているから問題ないと思う。

しかしどう思い返しても花京院、ポルナレフ、アヴドウル、イギー、お爺ちゃんのジョセフ、そしてジョースター家の宿敵であるDIO。仲間たちとの旅の記憶、そしてDIOとの最終決戦、それらの記憶が

一切無い。どういふことだろうか。もしかするとSBRの世界の空条承太郎なのかもしれない。たしかあれってパラレルワールドだった筈だし。しかも極め付けはこれだ。

「スタープラチナ！」

声に出して力むように体に入れると、空条承太郎の幽波紋であるスタープラチナが現れる。この幽波紋が出ている時点でDIOが存在していないとなると矛盾が生じる。承太郎はDIOが幽波紋使いになった影響で幽波紋を得たはずだ。それにジョジョのルールなら他の幽波紋使いとも出会っているはずだが、共有されている記憶は一切そんな記憶はない。はて、謎がまた深まった…

登校途中にコンビニでジャンプを購入し、学校へ向かう。今日は月曜日だ。普段ならジャンプを読んでから登校するが、俺という存在がいるため、なんとなく遅刻するのは嫌なので後で読むことにする。

正門前に立っていた先生は俺が早く来たことに驚き体調が悪いのかと心配してくる。といっても遅刻ギリギリの時間帯のだが。そうだな、後で体調が悪くなったフリをして保健室に籠ってジャンプを読むのもいいかもしれない。

教室に入ればそこは雰囲気最悪であり、1人の男子生徒がクラス全員から殺気を向けられている。たしか南雲ハジメだったか…

その男子生徒の名前を思い出していると、やけにキラキラした男子生徒に話しかけられる。

「空条、今日はいつものように遅刻しなかったのには驚いたよ。けどなんだその脇のジャンプは!!ここは勉学を嗜む場であって漫画を読む場所じゃないんだぞ!?!」

記憶を辿ればこいつは天之河光輝。ルックス、身体能力共に高く、知力も高い完璧超人。まるでアニメや小説の主人公のような男だ。しかしその反面、思い込みが激しいことが欠点らしい。だが承太郎の記憶からすれば口煩い面倒くさいやつという認識しかない。

「おいッ!!何とかいったらどうなんだッ!!無視するんじゃない!!」

少し天之河のことを思い出していた空白の時間を無視していたと思っただろう。天之河が俺に怒鳴る。

「やかましい。前にも言ったが興味のねえ奴の話聞くほど俺も暇じゃあないんでな。テメエと話すよりジャンプを読んでいる方が有意義な時間だぜ」

ギヤイギヤイと騒ぐ天之河を無視し自分の席に座る。最後列の席だ。ドカリと机に足を乗せジャンプを開く。

「ん?」

視線を感じたため、顔を上げるとクラス全員の視点が俺に集まっていた。ギロリと睨むとすぐさま顔を背ける。天之河とその友人である坂上龍太郎が俺のことを睨んでいるがデフォルトのため放置し、ジャンプに視線を下ろした。

4時限目、歴史。まるで小学生のような体型のロリ系の畑山先生の授業が始まる。

「く、空条くん…!せめて室内なのでその帽子だけは外しませんか?」
授業が始まって数分後、先生にそう提案される。今まで一度も言われた試しがなかったため、少しばかり動揺し、その勇気に敬意を称すがこの帽子は俺という存在のアイデンティティだ。そう簡単に外せるものではない。

「先生には悪いがそれを聞くことは出来ねーぜ。何しろコイツは俺の頭と同化しちまつてるからな」

「え、あ!? そうなんですか!? それは……って騙されるわけないでしょう!!」

帽子のツバを弾き先生に見せつける。一瞬それを信じた先生は俺に謝罪しようとするが、すぐに嘘だと気付きプンプンと頬を膨らまして怒る。その怒る姿はリスのような小動物のようで可愛らしく、怒っているはずなのに空気が和む。

「おいッ!! 毎度毎度言っているが態度が悪いぞッ!! それに授業くらい真剣に受けたらどうだッ!!」

天之河が立ち上がり俺を睨みながら糾弾する。毎度毎度ご苦労なことだ。

「やかましいぜ天之河。それに俺は別に適当に授業を受けてるって決めつけるのはちと早計過ぎるんじゃないのか?」

机の中に放置してあったノートに隣の生徒のノートの内容を全て一瞬の内にスタープラチナに写させ、それを天之河に投げ渡す。

「ッ!?!? これは……!!? 嘘だろ!?!」

ノートを確認した天之河は激しく動揺する。何せ今まで不真面目な態度+遅刻欠席ばかりだった俺が完璧にノートを取っていることは完全に予想外だったのだろう。少し腕が震えている。

「……嘘だ嘘だ!! いつも不真面目なお前がこんな風にノートを取れる訳がないッ!! さては恐喝して他の生徒のノートを奪い取ったな!?!」

天之河が俺に人差し指を向け糾弾する。冤罪でーす。が、実際には無断転載みたいなもんだから天之河のは的外れってわけじゃあない。だがそれを普通みんなの前で言うかな?

ほら、他のクラスメイトの視線が冷たくなってきたよ、うん。

「馬鹿か。名前を見る名前を。まさかそんなのも見えねー程テメエの目は節穴ってことはねえよな?」

まずまずノートは半分程までギッシリと書き込まれている。そんな使い込まれたノートに名前を書いてない間抜けはいるまい。普通なら先に名前が書かれている筈だし、それを奪ったのなら修正テープ

やら何やらで消している筈だ。

「お前のことだ!!聞けば昨日の深夜も繁華街を彷徨っていたそうじゃないか!!そんな不真面目なやつが、遊び呆けているような奴がここまですべて書いているなんておかしいだろ!!絶対何か良からぬことをしたに決まってる!!」

さりげなく俺の昨日の行動が暴露される。といってもその頃は承太郎しかいなかったのだがな。そもそも昨日は無くなったタバコを買いに行っただけで…って高校生が吸っていいもんじゃあなかったな。

「それに君もだ南雲!!」

「んぐ…?」

最後列の窓側の主人公席に座る南雲。俺の隣の席でいつも授業中は夢の中の彼は例外なく優等生の天之河に目をつけられるは必然だろう。

急に話を振られ怒鳴られた南雲は何を言われているのか理解してないよう眠そうな顔で首を傾げながら目を擦る。

「いつもいつも寝てばかり!!君達2人は何のために学校に来ているんだツ!!ここは勉学を嗜む場だぞ!!」

うむ、全くその通りだ。寝てばかりじゃ駄目だぞ少年。

「まあまあ、2人とも落ち着いてください!喧嘩はダメですよ!」

剣呑な雰囲気の中、先生が仲裁に入る。天之河は納得のいかない顔で俺と南雲を再度睨み席に着く。やれやれ、また面倒臭い奴に目をつけられたものだけ。というかいつも無視してたから反応したの間違いだっただな。

事情を理解出来ず南雲が困惑しながら俺と天之河を交互に見ていたのが印象に残った。

昼休み、俺は母さんが作ってくれた弁当を食べる。隣では南雲と、この学校で女神と呼ばれている美少女の白崎香織と一緒に弁当を食べている。他の男の嫉妬の視線が突き刺さっている。何故か女子からも突き刺さっている。南雲はすごく居心地が悪そうに笑顔を振りまく白崎に苦笑いを浮かべている。

そんな2人を尻目に立ち上がり教室から出ようとする、床に光り輝く奇妙な模様が浮かび上がる。

ついに来たか…ツ!!

「スタープラチナツ!!」

恐らくこの魔法陣のようなものは幽波紋使いの仕業に違いない。承太郎に憑依したからには遅かれ早かれ来ると思っていたがクラスメイトごと攻撃するつもりか？

「皆！教室から出て!!」

先生が叫ぶ。さらに生徒たちは悲鳴を上げる。奴の幽波紋能力はなんだ？無関係の人間を巻き込んでまで俺を始末しに来たとなるとまさかDIOの刺客か？

魔法陣の輝きはより一層強くなり、光は教室全土を包み込む。何も見えなくなるが、スタープラチナで視界を遮り辺りを警戒する。

数秒後、光が収まり始めた瞬間、先程まで教室に居なかった存在を把握し殴り掛かる。

「オラアツ!!」

「イシユタル様アツ!!ウボアア!!」

1番近くにいた老人に拳が届く寸前に兵士が割って入りスタープラチナに吹き飛ばされる。俺はすぐに老人から距離を取り周りを見渡す。そこはまるで神殿のような、全体的に白の神秘的な空間だった。壁には大きな肖像画が掛けられている。

目の前には煌びやかな衣装を纏う老人以外に甲冑を纏う兵士と、老人の衣装をグレードダウンさせたような服装の集団がいた。

「なるほどな…空間転移に兵のようなものを操る能力か…やれやれ、

初戦としてはなかなかハードなんじゃあねえか？」

「貴様ツ!!」

空間転移…もしくはデス13のような夢の世界か、それとも幻覚かはわからないが、確実に先程までとの空気が違う。

兵士たちが槍や剣を向ける。これがわからない。幽波紋は例外を除いて一つしか能力を持たない筈だ。ならこの兵士たちはこの神殿と同じ能力で出来ているのだろうか。

「待てお前たち。その武器を下ろしなさい。勇者様、そしてその御同胞様方。突然の召喚に困惑を隠し切れていないご様子。どうかご説明をさせていただきませんか？」

好好爺然とした微笑を浮かべる老人。周りの兵士や、老人と同じような法衣を纏った奴らとはまるで覇気が違う。素人目でもわかるほどに只者ではない。

「ようこそトータスへ。歓迎致しますぞ。私は聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、よろしくお願い致しますぞ」

やけに友好的？な態度のイシユタルとか名乗る怪しげなジジイ。どう見ても怪しい感満載のジジイだ。信用してもいいものか…それに幽波紋使いではないのか？スタープラチナをジジイの目の前に出しているというのに一切反応していない。まさか本当に見えていないのだろうか…

「おいーいきなり他人を殴り飛ばすなんて非常識じゃないか!?何が何だかわからないのは理解できるがあれはやり過ぎだろ!!」

天之河が指差す先には先程殴り飛ばした兵士がピクピクと痙攣しながら大理石のような綺麗な壁に埋まっていた。うん。承太郎の記憶には思い込みが激しい奴とあるが今のところ真つ当なことしか言っていない気がする。承太郎って人を見る目はあると思うからなあ…検討外れってことはないと思うけどね。まだわからないか…

ひとまず返答すればまた噛み付かれて面倒くさいので無視しジジイに質問を投げかける。

「待て…ジジイ、召喚と言ったな？テメエは幽波紋使いじゃあなく異

世界から俺たちを魔法的なもんで呼び出したってことか？まさか世界がヤバイとかそんなんじゃないやあねーのか？」

わからないことがあるはずぐに聞く。これが一番大事なのよ。最近の若者はこれが余り出来ないって聞いたけどマ？

「ええ、幽波紋使いなるものは聞いた事も見た事も御座いませぬが、貴方は理解が早くて助かります。しかし：少々過程が違いますな。貴方を召喚したのは我々ではなくエヒト様です。我々人間族が崇める守護神にして唯一神で有らせられ、世界を創られた至上の神で御座います。我々人間族の窮地をお救いになるべく、貴方様方を召喚なされたのです」

よくぞ聞いたとばかりにニコニコと気持ち悪い顔をしてエヒトとやらを語るジジイ。正直引いた。

「立ち話もなんですのでひとまず場所を移しましょう。ご案内致します」

そうジジイに誘われる。信用してもいいのか：恐らく幽波紋使いではないだろうが別の危険性を感じる。こんな感じは初めてだ。これが直感：つてやつなのだろうか：

「皆！困惑しているのはわかるけどひとまずイシユタルさんの言う通り移動しよう！不安なものもわかるけど今はイシユタルさんに今の僕達の状況を詳しく教えてもらわないといけない！」

声高らかに叫んだのは天之河だ。彼の持つカリスマオーラで他の生徒たちは覚悟を決めたように先を歩むイシユタルについていく。

待て待て、そう簡単に怪しい人間について行っても大丈夫なのか？いきなり異世界やらに召喚してきた連中だぞ!!もつと危機感持てよ!!

「チツ：やれやれだぜ。目覚めて初日から転移とはな：嫌な予感しかないぜ：」

俺も周囲を警戒しながら、クラスメイト達の後を追った。

勇者（笑）の片鱗

イシユタルのジジイに案内されたのは、長いテーブルが幾つも並んだ大広間だ。

運ばれた飲み物をちびちびと飲み、安全かどうか確認してから一気に喉に流し込む。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱している事でしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞きください」生徒達が鎮まるのを確認し、イシユタルが紡いだ言葉は要約するとこういうことだった。

この世界はトータスというらしく、人間族と魔族、そして亜人族が存在している。この内人間族と魔族が長年の間争っているらしく、最近までは戦力が拮抗していたが、最近になりその均衡が崩れたそうだ。数で勝っていた人間族に対し、質で勝っていた魔族が魔物の使役に成功し、人間族のアドバンテージは亡くなったのだ。

まあそんなこんなで人類滅亡の危機。そこでエヒトが俺たちがいた世界、上位の世界から魔族を打倒しえる力を持った俺たちを召喚したというわけだ。

やれやれ、厄介ごとを無関係の俺たちに押し付けないで欲しいぜ。「ふざけないでください！結局、この子達に戦争させようってことでしょ！そんなの許しません！ええ、先生は絶対に許しませんよ！！私たちを早く帰してください！きつと、ご家族も心配しているはずですよ！貴方達のこととはただの誘拐ですよ！！」

説明を聞き終え突然立ち上がり猛然と抗議する。それは畑山先生だ。ウガーツと叫ぶ先生を見て他の生徒たちはほんわかとした雰囲気になっていくが、次の瞬間、一気に凍りつくことになる。

「お気持ちはお察しします。しかし…貴方方の帰還は不可能です」

「ふ、不可能って…ど、どういうことですか!? 喚べたのなら返せるんでしょ!?!」

「先程言ったように、貴方方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、貴方方が帰還出

来るかどうかエヒト様の御意志次第ということですか」

「そ、そんな…」

先生はストンと脱力したように腰を椅子に落とす。そして動揺が生徒たちにも広がっていく。

俺からすれば元の世界にはそこまで未練はないが、今まで承太郎がホリイさんと過ごしてきた日々は記憶に刻まれている。心優しく、子供思いな母さんは、俺がいなくなれば確実に大きなショックを受けるだろう。最悪の場合心に大きなダメージを与えてしまい、心の病になつてしまふかもしれない。それは避けたい。早く帰り安心させたい。

心底この世界の戦争やらに興味ないし関わらないつもりだが、ここはイシユタルの本拠地。しかも教皇という立場の人間だ。下手に断れば始末するために刺客を送られる可能性がある。

天之河が無駄にキラキラしながらカリスマを発動し、戦争に参加するように促す。ヤベエなこいつ。戦場に一般人を巻き込もうとしているぞ。まあ小説で言えば序章でしかないし、この状況に興奮しているだけかもしれない。涙目で止めようとしている先生に加勢して否定したいが、新たな問題に巻き込まれる可能性が出てくるため黙って成り行きを見ておく。

イシユタルは一層笑みを浮かべ天之河を見つめていた。

「やれやれだぜ…」

召喚された次の日。王様や皇太子などお偉いさんとの挨拶も全て終わり、これからは俺たちのステータスを調べてこれからの特訓方式

も記載されていないかった。

少し不安になりスタープラチナを出すのが、どこにも違和感はないし問題なく出せる。恐らくだが幽波紋はこの世界における法則に当て嵌まらないのだろう。まだまだ憶測でしかないが、これしか幽波紋が載っていない理由を説明出来ない。

もともと幽波紋はこの世界に来る前から使っていたものだ。魔法や技能のような魔力頼みのもではなく、幽波紋は強い精神力を必要とする。よって魔力で起動するステータスプレートには表示されなかったのだろう。

しかし、やはり上位世界から来たという恩寵をかなり受けている。体の調子が良いということもあり、幽波紋の調子もかなりいい。今では前の世界のスタープラチナよりパワーやスピードは上がっているだろう。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に3桁か……技能も普通は二つや三つなんだが……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

メルド団長の快活な声が響き、どよめきが走る。どうやら天之河が勇者だったようだ。まあ性格的にもアイツが勇者だとは思っていたため驚きは少ない。少し胸を張り誇らしそうにしている姿に少しイラツとしてしまった。

話を余り聞いていなかったがこれ団長に報告していくスタイルなのか……メルド団長が俺を見ていたのでプレートを差し出す。

「断罪者……か。聞いたことがない天職だがステータスや技能的にも戦闘職に違いない！ステータスも筋力と体力に関しては勇者をも上回っている！いやあ、大型新人が大量だな!!」

ガツハツハと豪快に笑うメルド団長。プレートを返され元いた場所に戻る。次は南雲の番だ。

南雲のステータスプレートを見たメルド団長は、今まで規格外のステータスばかり確認してきた為、ホクホクしていたが、「うん？」と笑顔で固まる。「見間違いか？」というようにプレートを叩いたり光にかざしたりする。そして、ジッと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートを南雲に返した。

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶する時に便利だとか…」

錬成師、それで思いつくのは錬金術といったサポート職だ。武器を造ったりと色々出来る万能職だ。しかしこの世界ではかなりありふれた職業らしい。

メルドのマイナスな言葉にいつも南雲を目の敵にしていた男子達がかいつく。くいついたのは白崎に惚れているであろう小物感溢れる男、檜山大介だ。他にも、檜山を筆頭に何人かが南雲に絡む。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？鍛冶職でどうやって戦うんだよ？メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」

「……いや、鍛冶職の十人に一人は持っている。国のお抱えの職人は全員持っているな」

「おいおい南雲く。お前、そんなんで戦えるわけ？」

「さあ、やってみないとわからないかな」

「じゃあさ、ちよつとステータス見せてみるよ。天職がシヨボい分ステータスは高いんだよなあ？」

檜山は南雲から俊敏な動きでステータスプレートを奪い取る。そしてステータスを見た檜山達は大声で馬鹿にし笑い出す。

南雲のステータスはオール10、この世界での平均的なステータスだ。さらに技能は言語理解を除き一つだけという。無能だと笑い南雲を苔にする檜山達。南雲に想いを寄せているであろう白崎を見れば、体がプルプルと震えている。そろそろ噴火しそうだ。

こういったことに敏感そうな天之河は離れた場所で坂上と談笑している。こういう時にこそテメエが出てこいや、そう思った俺は悪くない。

柄でもないが仲裁に入る。これ以上放置しておくで白崎がプツツンして面倒臭いことになりそうだ。

「つまんねーことしてんじゃあねーぜ」

檜山の手からステータスプレートを奪い取る。そこまで大きな声を出したつもりはなかったが、意外にもその場に声がよく響き渡り、静寂が生まれる。

「右見てみな」

檜山達、南雲を笑っていた男子が言われた通りに首を動かすとそこには顔に血管を浮き出させ、背後に般若を浮かび上がらせたマジギレ寸前の白崎の姿が。それを見た男子達はヒュツと息を呑み顔を蒼くする。

「というか白崎って幽波紋使いだったのか…」

「ほら、次は奪われねーようにするんだな」

「あ、ありがとう。空条くん」

ステータスプレートを南雲に投げ返し元いた場所に戻る。途中で白崎の異変に気付いた天之河が声をかけるが「天之河くんには関係ない。ちよつと今話しかけないで」と拒絶され轟沈していた。

「オラァ!!」

自分の身の丈よりも大きい大剣を叫びながら振り回す。振りかぶった大剣は見事的である大木を斬り倒す。俺が持っているものは市販で売っている1番安いナマクラだ。それで大木を両断出来る見事としか言いようがないだろう。しかし…

「違うな…」

何故か手に馴染まない。理由は単純、承太郎の体が受け付けないのだ。元々承太郎は喧嘩に武器を使わない。基本ステゴロだ。それに拘りがあるのかはさておき、拒否感が凄まじい。しかし物理無効の敵が現れれば俺の剛力は無力になるため、魔法を一切使えない俺には別の攻撃手段というものは必要である。

体に馴染まないのはどうしようも無い。いざとなれば咄嗟に盾に

することも出来るだろう。王宮の宝物庫から適当に持つてきた大剣と、持つていた安物の大剣を持ち帰る。軽く震えば、大木を豆腐のようにも容易く切り裂く。

「……フン」

大剣を地面に放り投げ、胸ポケットから煙草を取り出す。スタープラチナの指パツチンで摩擦熱を発生させ火をつけ一服する。

フウ…最初は煙草に忌避感があったが今ではそんなものは既に一切残っていない。しかし問題は煙草の数が無いということだ。

召喚されてから二週間、こつちの世界で補充出来るはずもなく…

トータスの煙草もあるにはあるらしいが、中毒性など、危険性がなにも言い難い。よって簡単に手が出せないのだ。

煙草の吸い殻を捨て、大図書館に向かう。俺はもうそろそろでこの国から出て行くつもりだ。俺は人間族と魔族の戦争やらに何の関係もないし興味もない。正直なところ、会ってもない赤の他人の命よりも自分の命の方が大切なのだ。それに俺の身体は承太郎の借り物なわけで、勝手に傷付けようものならオラオラされてしまいかねない。

図書館に着いた。大きな両びらきのドアを押し開け中に入る。視線が集まるが無視して魔物大全やらトータスの地理やらが載った本を適当に取り、図書館を後にする。司書に注意されたが、王様に許可は貰ってあるぜと適当な嘘をつき自室に戻る。俺はゴロゴロしながら本を読むタイプなのだ。

本を自室に持ち帰り本を置いて、訓練施設に向かう。俺の剣の扱いは素人と言っても過言ではない。力任せに振るしか能のない男だ。少しなりにもメルド団長から得られるものは得て置きたい。

向かう最中、何やら呻き声と笑い声が聞こえた。ショートカットして窓から窓に移動しなければよかった。面倒ごとは苦手なんだ。やれやれだぜ。

窓を開けて上半身を覗かせると、そこには血反吐を吐きながら、腕を曲げてはいけない方向に曲げられ悶絶する南雲と、それを見て馬鹿

みたいに笑う檜山達の姿が。

流石にこれは…俺じゃあなくてもプツン来るぜ…

▽▽▽

「ちよ、マジ弱すぎ。南雲さあ、マジやる気あんの？」

檜山は南雲を見て馬鹿にしたように笑う。彼は南雲の右腕をグリグリと踏みつける。ミシミシと人間の体からなってはいけないような音も聞こえる。もう既に南雲の身体はボロボロだった。戦闘職の檜山、中野、斎藤、近藤。いつも南雲に絡み、馬鹿にし嫌がらせをする小悪党4人組。今まででも暴力は何度か受けたことはあったが、ここまでやられるのは南雲にとっても初めてのことだった。明らかに度が過ぎていく。そう、彼らは突然手にした力に酔っているのだ。漫画やアニメ、創造の世界の力だったものが使え、さらに憎い南雲は口な力を持っていない。彼らからしたら今の南雲など格好の餌ではないだろう。

さながら彼らの頭の中では、自身達はさながら悪者をやっつけるスーパーヒーローのように見えているのだろう。やっていることは集団リンチに変わらないが。

「うう……」

南雲は呻くだけで何も答えない。南雲は悔しさに打ち震えるも何の行動も起こさない。ただただ耐えるだけである。それには訳があった。南雲小さな頃から人と争うこと、相手に敵意や憎悪を持つということが苦手であり、自分が折れ、我慢すれば終わるという思考に陥っていたのである。

(あ、もうダメだ……)

南雲の視界がボヤけ始める。南雲もここまでやるかと心の中で悪態を吐きつつ意識を落とそうとしたその瞬間、冷たく、重い。そんな声がこの空間を支配した。

「落ちるところまで落ちちまったな檜山……これまでも幾度と無く警告してきた筈だが……まさか弱者を痛ぶる外道になってたとはな……やれやれだぜ」

底冷えする声を発するのは不良として県単位で有名な空条承太郎だった。彼の口癖のやれやれだぜ。それには諦めと呆れ、そして怒りの感情が含まれていた。

ドドドドツ、空気が震える。空条承太郎の放つ謎の凄みのある威圧感。それに檜山達小悪党達は冷や汗が止まらない。

「飲みな」

体力が回復するポーションを南雲に飲ませる。効果は薄かったが、先程と比べだいぶ楽になった。

「テメエ達にはそろそろ口じゃあなく……こつちで分かせた方がよさそうだな!!アアツ!!」

拳を強く握り檜山達に歩み寄る承太郎。その威圧感に檜山達は震えが治らない。

「ひ、ヒイ!?!…い、いや待て…!!ここに風撃を望む…今の強くなった俺たちなら空条にも勝てるぞ!!風んツ……あ、ちょ、や、やめてくださいッ!!」

魔法を詠唱し終え、勝てる可能性は高いと踏み、後ろで震える仲間達に喝を入れようとした檜山だったが、魔法を撃ち出す直前に承太郎に頭を鷲掴みにされ、その痛みで魔法を解いてしまう。

「俺は優しいからな。一思いにぶちかましてやるぜ…！」

承太郎は腕を大きく振りかぶり…

「オオラアッ!!!」

振り抜く。檜山は綺麗な弧を描いて背後に吹き飛び、壁に打ち付けられ失神する。

それを見た近藤、斎藤、中野は一斉に承太郎に土下座し詫びるが、当たり前ながら承太郎はそれで治らない。

「俺はやると言ったらやる男だぜ。反省も何もしねーような奴らを許すと思うか？」

その言葉に絶望した三人だったが最後の抵抗とばかり承太郎と戦ったが、全員、壁、床、天井に上半身を埋められる結果となった。

「何やってるの!?!」

突然、怒りに満ちた女の声が聞こえた。白崎香織だ。想いを寄せる南雲がボロボロの姿で倒れているのだ。彼女のその怒りはもつともだろう。

「白崎、南雲に治癒魔法を頼むぜ。あと、この伸びてる奴らにはやらなくていいぜ」

承太郎が言い終わる前に南雲の治癒を開始する。それを見て承太郎は少し口角が上がる。

「やれやれだぜ」

承太郎はそう締め括り、その場を去ろうとしたが、それは第三者の介入によって遮られることとなった。

「おいッ!!空条!!」一体これはどういうことだ!!」

遮ったのは勇者の天之河だ。

「大丈夫か檜山!!」

「……あ、あれ？」

天之河が唯一突き刺さっていなかった檜山の頬を叩き起こす。檜山は目覚めたと同時に自分が置かれている状況を理解し、天之河を承太郎と対立させるように振る舞う。即ち、保身に走ったのだ。

「ひッ!!?空…ツウッ!!」

わざとらしく殴られた箇所を押さえ呻く。その咄嗟の演技には流石の承太郎も舌を巻いた。

「落ち着け檜山。一体何をされたんだ!？」

ブルブルと震え、檜山は先程のことを大袈裟に、有らぬ事実を加え脚色し天之河に語った。しかし埋まっているメンツがメンツのため、天之河と一緒にいた坂上や八重樫雫もすぐにそれが嘘だと見抜き呆れる。南雲もよくそんな嘘を寝起きに瞬時に言えるなど呆れた。

普段からの彼らの行ないや言動を見て、通常の思考回路を持つ者ならすぐに見破れる嘘。それを信じる奴などいない。そう皆が思っていたが…

「香織…檜山達を治療してやってくれ…空条…お前はなんてことをしたんだ…!!決闘しろッ!俺が勝ったら檜山達に謝ってもらおうぞ!!」

勇者である天之河がそんな嘘を信じた。これには檜山も内心ニッコリ笑顔。

「いや、流石にそれは嘘でしょ」

「それくらい俺でも分かるぞ」

天之河に坂上と八重樫が待ったをかけるが勇者(笑)は聞く耳を持たない。

「空条は元々日本でも毎晩出歩いて一般市民を病院送りにしているんだぞ!!それに檜山は南雲のことを思って特訓をしてあげていたそうじゃないか!!そんな彼らの善意をめちやくちやにしたんだ…!!許せない!!」

一般市民…承太郎は内心首を傾げる。承太郎が病院送りにしたのは突っ掛かってきた不良や、カツアゲをするクズばかりだ。そこらの奴らとは違い空条承太郎は無意に喧嘩をしない。

「ま、まっつて天之河くん!!空条くんは僕を助けて…」「無理するな南雲。南雲も空条に脅されているんだろう?檜山から聞いたさ。安心してくれ。俺が空条を倒してやる。だからそう怯えなくてもいい!!」

当事者である南雲の承太郎を庇う台詞に、脅されているのだと思考し安心しろと投げかける。南雲からしたら安心できる要素がない。

承太郎はこのやり取りを見てこう思った。

あー（察し）

承太郎は何かを察した。

決闘

「これより、光輝と承太郎による決闘を執り行う!!」

メルドの声が訓練施設に響き渡る。対峙するのは承太郎と天之河。天之河が勝てば承太郎は檜山達に謝罪をし、これからの生活態度を改めることを要求される。承太郎は戦うメリツトはないが、これ以上関わられるのは面倒という理由で、承太郎はこれからは俺に重要なこと以外話しかけるなということを要求した。

「始めッ!!」

木剣を手に持つ天之河が承太郎との距離を詰めるために疾走する。承太郎は動かさずドツシリ構え、最上段に木剣を構え、迫りくる天之河の脳天に振り下ろす。

「甘いッ!!」

天之河は承太郎の剣を受け流すように斜めに構え、衝撃を軽減する。剣を振り終えたばかりで隙だらけの承太郎に天之河は剣撃を放つ。それは首の付け根へと直撃し、勝利を確信する天之河。しかし焦らない。一度引き再度距離を詰め、余裕を持って勝利しようとする。しようとした。

だが、その意思に反して剣は動かない。

「痛えな…オラアッ!!」

「カハッ…!?!」

承太郎は掴んでいた。天之河の木剣を。

承太郎は剣を引つ張り天之河を引き寄せ、脇腹に回し蹴りを放つ。蹴りを喰らった天之河は、衝撃により空気を吐き出し剣を離してしまふ。そのまま背後に吹き飛ばされる。

「オラ、返すぜ!!」

天之河から奪った木剣を投げ付ける。剛腕から投げられた木剣は、一種のミサイルと化し、天之河を穿とうと迫るが、寸でのところで躲すことに成功する。

「なッ!?!き、汚いぞ!!」

「汚いもなにも決闘ってのは剣だけでヤルもんじゃあねーぜ」

ズドンツと天之河の後ろで大きな音が鳴る。それを天之河は青くした顔で見る。剣が着弾した壁は陥没し、大きなクレーターを作っている。当たれば確実に戦闘不能になる。それに天之河は戦慄する。

「ただだぜ」

もう一本、もともと持っていた木剣を同じように投げ付ける。天之河は過敏に反応し、動こうとするが、途端に足を止める。

「舐め…るなああ!!!」

目前に迫る木剣を叫びながら掴み取る。天之河の手の皮は捲れ血を流すが、天之河は気にせず剣を持ち直す。自分の信じる正義のために、自分の信念を貫き通すために。

「限界突破ツ!!」

天之河から黄金の光が溢れ出す。そして駆ける。先程よりも速く。そして強く。何もかもが倍以上の力になり承太郎に襲い掛かる。

「ウオオオオオオオオオツ!!!」

「オオラオラオラオラアツ!!!」

天之河から凄まじい威力の剣撃が繰り出される。それを承太郎は拳で迎え撃つ。剣が迫れば拳で弾く。拳が迫れば剣で受け流し弾く。高らかな効果音を鳴らしながら一発一発、拳と木剣が交わる度に空気を揺るがす。

正面からの激突。ほぼ互角の打ち合い。上回ったのは天之河だった。

「ハアツ!!」

「グツ…!!」

天之河が振り上げた木剣は承太郎の拳を大きく上に弾き退け反らせる。これは一瞬の隙。しかしその隙は天之河にとって充分なものであった。

「万翔羽ばたき、天へと至れー”天翔閃”!!」

木剣は天之河の魔力を纏い光り輝く。それは悪を断罪する正義の光。天之河にはこの技以上に強力な神威という技があるが、それは詠唱時間が長い。よって、同系列であり、詠唱が短く強力な天翔閃を選択したのだ。

(これは…マズいぜ…!!)

承太郎は初めて危機感を抱く。これを喰らえば負ける。そう本能的に理解したのだ。承太郎はこれまで禁じていた力を解放する。承太郎は天之河を認めたのだ。承太郎は今まで天之河を口先だけの野郎だと思っていたが、この戦いで彼への印象は変わった。やると言ったらやる…信念を貫き通す、まだまだそれは小さなものだが、彼からもほんの一筋の黄金の精神を垣間見たのだ。

(なかなか熱い奴じゃあねーかッ!!)

「スタープラチナッ!!」

承太郎と迫りくる木剣の間にスタープラチナが顕現する。そして振り抜かれる拳。それは木剣を横から殴打し軌道を大きくずらす。

そしてスタープラチナの瞳は驚愕する天之河を射抜く。

「いくぜオイッ!!オラアッ!!!」

数多の衝撃が天之河を襲う。目に見えない何かに高速で殴られている。右腕、左腕、右足、左足、胴体、そして顔面。ありとあらゆる部位を容赦なく穿たれる。そして…顎に今までの中で最も強烈な一撃が襲い掛かる。

「ブ…あ……」

勢いよく宙へと飛ばされる。そして地面へと衝突する直前に、承太郎が片手で受け止める。

それを見たメルドは天之河が気絶したことを悟り、決闘を終着させる。

「勝者、空条承太郎ッ!!」

メルドの声が訓練施設に木霊する。それと同時にギャラリーの生徒達は、まさか天之河が負けるとは思っていなかったため、大きくどよめく。

そんな中、承太郎は白崎の下に瀕死の天之河を差し出す。

「悪いが治してやってくれ」

「う、うん!!」

白崎が詠唱を唱えると、天之河は光に包まれ、急速に傷を治してい

く。

「素行を直すつもりも檜山たちに謝るつもりも一切ねーが、特訓にやら付き合っつてやる。そう起きたら言っつていってくれ」

承太郎は白崎に伝言を託し、ざわめきが残る訓練施設を後にした。

▽▽▽

天之河との決戦が終わった。ベッドで寝そべりながら振り返る。正直言っつて危なかった。最後の場面でスタープラチナを出し渋っつていれば負けていたのは俺だっただろう。それ程までに天之河は強かった。もともと前の世界で武道を習っつてきたというものもあるだろうが、決定的なものは技能の存在だった。限界突破。言葉の通り、反動はあるが一時的に全ステータスを倍に引き上げる技だ。

幽波紋はこの世界の常識を超えたものだ。この世界の人間にバレれば俺は解剖やら幽波紋を説明するために躍起になるだろう。その可能性が日本でも0ではないということにため息が漏れる。

そのような問題もあり、スタープラチナはいざという時にしか使うつもりはなかったが、その考えは今日打ち砕かれた。幸い俺の幽波紋は時を止める以外はどうか紛らわせることが出来る範囲だ。不自然なのは俺が触れていない箇所にはスタープラチナの拳が穿つことだ。

それをどうにか改善しないといけない。今のところ思いつくのは初期、承太郎が自分に向けて放つた銃弾を掴み取つた時のような腕だけ、つまりはスタープラチナの一部を顕現させることだ。

試しに行っつてみれば思つたより簡単に来た。だがそれだけだ。これだけでは大差変わらない。俺が目指すべきはスタープラチナとの一体化だ。わかりやすく言えばセッコのオアシスのようなもんだな。俺自身がスタープラチナを纏い、同じ速さで俺が動かなければ幽波紋の違和感というものは隠せない。

ステータスプレートの内容を隠蔽する方法もあるが、看破する技能

もないとは言い切れないため、早急な対策が必要だ。この世界、俺より強い存在など幾らでもいるのだから。

いきなり話が変わるが、明日はオルクス大迷宮とやらの遠征に行くらしい。何か嫌な予感がするが気のせいだろうか…

翌日、俺たちはメルド団長が用意した馬車に乗り込む。目指すはオルクス大迷宮近隣の町、ホルアドだ。そこは冒険者の町とも言われ、オルクス大迷宮に挑戦するために集まった冒険者が、それに便乗し儲けようと集まった商人達が、それぞれ集まりできた町だそうだ。

そして馬車に揺られること約1日、ホルアドに到着した俺達は王国直営の宿に泊まるそう。馬車から降りた俺は座りっぱなしで固まった体を伸ばす。うん、気持ちいい。

宿は王国の部屋と比べると手狭かつ、2人部屋だが、普通の宿に比べれば充分広い。部屋に適当に荷物を置き、夜の街に繰り出す。せっかく異世界に来たのだ。異世界の町、よくあるファンタジー世界の町を見ておきたかったのだ。夜は治安が悪いのか、怪しい闇市的なものがあるのかなどだ。

出かける際、同じ部屋の南雲に止められかけたが、問題なく外出することが出来た。

さて、何をしようか。と、そう言えばこれから自立するのだから先に冒険者登録をしておこう。というわけで冒険者ギルドに向かうことにしよう。

|| ||

ステータスプレートには職業とランクが追加されていた。ランクとは青から金まであるらしく、階級制なんだとか。まあテンプレテンプレ。

用件も済んだことだし出るか、と引き返そうと足を進めれば、俺の進行方向にニヤニヤと笑いながら足を通路に出している冒険者がいた。周りの冒険者もニヤニヤと笑っている。ふうん、テンプレテンプレ。

絡むのはめんどくさいので華麗に迫る足を回避しギルドから出る。冒険者は追いかけてきそうだったが、スタープラチナで後ろから酒瓶で軽く殴り、乱闘騒ぎにしその場から脱出する。

その後は怪しい店を数店周り、適当に魔道具を購入し宿に戻った。治安はギルドでお察しだったが悪かった。

部屋では何やら悶えている南雲がいたが、無視して寝た。

「オラアツ!!」

そして更に翌日、俺たちはオルクス大迷宮に挑んでいた。俺は筋肉質なネズミを殴り飛ばし、絶命したのを確認後、魔物の核といえる魔石を剥ぎ取る。

「よし、下がっていいぞー!」

メルド団長に言われ素直に従いクラスメイトの最後尾に戻る。ここから特に記述することはない。様々な魔物が現れるが、全てクラスメイト達に蹂躪されていく。このままじゃあ何もなく終わりそうだな。

「天翔閃!!」

天之河が俺にも放った技を魔物に放つ。魔物はチリもなく消え失せ、それだけに留まらず光の本流は大迷宮の壁に直撃する。

「へぶう!？」

「この馬鹿者が。気持ちにはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃないだろうが！崩落でもしたらどうすんだ!!」

「す、すみません…」

魔物を消し飛ばし満足そうな顔をしていた天之河に拳骨が襲いかかり、メルド団長に説教される。それを遠巻きに見ていた俺だが、天之河の一撃で崩れた壁の奥の部屋に煌めく宝石を見つけた。見つけてしまった。

「あれは…」

あれは確かグランツ原石。宝石の原石のようなもので、王族や令嬢への人気が高く、求婚の際に使われる宝石トップ3にランクインしている。

まもなく俺以外の全員も宝石の存在に気づく。

メルド団長の説明でその求婚で使われている、そう聞いた白崎含む女性陣は素敵…と頬を赤くし、想い人から求婚される自分を想像する。

それを見た檜山は意気揚々とグランツ原石に近寄る。取ろうとしているのだろう。メルド団長が注意するも、檜山は止まらず触れてしまう。あいつ、何も反省していない。あれだけ警告したというのに… 檜山がグランツ原石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が展開される。俺たちはこれを一度見て、食らったことがある。これは…

「転移の魔法陣…!!」

おおよそどのゲームでも1番厄介なトラップだ。ポケダンで階段の目の前でワープさせられ、モンスターハウスに入ってしまった時には発狂してしまったものだ。当然その時は死んだ。ゲームを投げ捨てた。

光に視界を潰され、次に光が収まると、そこは巨大な石造りの橋だった。やはり転移されたか。警戒し周りを見れば、混乱している生徒たちと、的確に指示を飛ばすメルド団長と騎士達。

次の瞬間、橋の両端に魔法陣が展開され、そこから骸骨兵のような魔物と、凄まじい威圧を放つ巨大な魔物。名は…

「まさか…ベヒモス…なのか…?」

ベヒモス…悪魔の名を持つ怪物が俺たちの前に立ち塞がった。

奈落に煌めく白金

『グルアアアアアアアッ!!』

ベヒモスが吠える。そして生徒達は一斉に恐慌状態に陥ってしまった。ここにいる殆どの人間が死を感じたのだ。

さらに背後からは骸骨の魔物、トラウムソルジャーが現れ退路を塞いでいる。

そんな中いち早く正気に戻ったメルドが矢継ぎ早に指示を飛ばす。

それは騎士達でベヒモスの足止めをし、生徒達をその間に逃すというものだ。勿論、それに納得しない者がいた。

「待つてください、メルドさん！俺たちもやります！あの恐竜みたいな奴が1番ヤバイでしょう！俺たちも…」

「馬鹿野郎！あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！奴は六十五階層の魔物。かつて最強と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！さっさといけ!!私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ!!」

メルドの危機迫る表情に天之河は一瞬怯むも、見捨てる事が出来ない。踏みとどまる。

メルドが天之河をもう一度説得しようとした次の瞬間、ベヒモスが咆哮を上げながら突進する。

すぐさま騎士達が光の結界、聖絶を張り辛うじてベヒモスの突進を防ぐ事に成功する。

「我々では少ししか時間を稼ぐことが出来ん！さっさと撤退しろ！」

「嫌です！メルドさん達を置いて行くわけにはいきません！絶対皆で生き残るんです！」

「馬鹿者め…!!」

そう話している間にもベヒモスは聖絶を打ち砕かんと何度も頭を打ち付けている。

徐々に聖絶はヒビ割れ、隙間から血走った目がギョロリとメルド達を睨み付ける。

「俺が足止めする。テメエらは後ろの骨をどうにかしな」

この喧騒の中、そこまで大きな声でなかったのにも関わらずメルド達の耳によく響いた。承太郎だ。承太郎が発したのだ。

「だから撤退しろと言っているだろ！どうしてこんな時に我儘ばかり言うんだお前は！」

メルドが青筋を立て怒鳴るが、承太郎は態度を崩さず、声を荒げず静かに対応する。

「馬鹿はどっちだ。かつて最強だった冒険者が手も足も出なかった魔物、ならテメエらはその冒険者が手も足も出なかった魔物を充分な時間足止め出来ると思っっているのか？」

「むう…それは」

現在、聖絶でギリギリ抑えられているがもう限界に近い。それにベヒモスの一撃をいなすにもかなりの魔力と集中力がある。もつても数分程度だろう。その数分で後ろでパニックになっている生徒達が、背後から迫る複数のトラウムソルジャーを殲滅し避難出来るか…かなり難しいだろう。天之河のようなカリスマを持つ人間がいれば話は別だろうが、決して彼が退くことはない。承太郎にもカリスマはあるが、いかんせん日本での行いから人望がない。従わず一部の生徒が反発する可能性がある。

「天之河は後ろの奴らを纏めて突破しな。そら、南雲のヤローがテメエを呼びに来てるぜ」

「天之河くん!!」

承太郎の言葉通りに南雲が後方から駆け寄ってきた。皆が驚愕している中、南雲は天之河に掴みかかるような勢いで捲し立てる。

「早く撤退を！皆のところを！君がいないと！早く！」

「南雲!?何故ここに来たんだ!!それに君も俺に下がれと言うのか!?メルド団長達を置いて行けと!」

「あれが見えないの!?皆パニックになってる!リーダーがいないからだ!」

南雲が後方でパニックになっている生徒達を指を刺しながら、普段からの温厚な態度からは考えられない程の剣幕で天之河を怒鳴りつける。

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ！皆の恐怖を吹き飛ばす力が！それが出来るのは天之河くんだけでしょ！前ばかり見てないで後ろもちゃんと見て！」

呆然と、混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見る天之河は、承太郎に視線を送り、何かを否定するようにブンブンと首を振り南雲に頷いた。

「ああ、わかった。直ぐに行く！メルド団長！すいまー」
「下がれえー！！」

天之河の言葉は途中で遮られ、メルドの声が周囲に響き渡る。それと同時に聖絶がガラスのようにひび割れベヒモスに破られる。

「オラアツ！！……チツ！！」

承太郎がすぐさまベヒモスの頭部に拳を叩き込み、ベヒモスから放たれた暴風を相殺するが、単純に力負けし後ろに弾き飛ばされる。

「空条くんツ！！」

「南雲オ！！振り返るな！！テメーがここに出てきたって事は策があるっつーことだよなあ！？ならさっさとそれを実行しろ！！俺はこんなのでやられる程やわじやあねえぜ！！」

「…ツ！！天之河くん！！一瞬だけでもベヒモスに隙を…！！」
「任せろ！！」

南雲が天之河に声をかける。ベヒモスは既に額を赤熱化させ、こちらにそれを放たんと跳び上がる。

「神意よー！全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ！神の息吹よ！全ての暗雲を吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ！ー 神威」
それに対し天之河が放つは現段階での最強の一撃、神威。聖剣から極光を放ち、凄まじい威力に空気が振動する。

聖剣から放たれた極光は、宙のベヒモスをも呑み込み、光が周囲を塗り潰す。誰もがやったか…そう思った次の瞬間、凄まじい激震が生徒達に襲い掛かる。

「無傷…だと…!?」

神威を放った天之河の目の前、あと一步でも前に出ていけば巻き込まれていただろう。そこにベヒモスが頭から橋に突き刺さっていた。

しかも無傷で…だ。バタバタと元気よく額を抜こうと暴れている。神威でベヒモスの着弾位置をずらしていなければどうなっていたか想像した天之河は恐怖に冷や汗を流す。

「十分だよ天之河くん！ 〃錬成〃!!」

南雲が地を手をつけ魔力を流す事で、ベヒモスの埋まっている頭部周辺の橋が隆起し、ベヒモスに覆い被さる。南雲の策とはただ単に錬成で足止めするという単純なものだが、効果的面、ベヒモスを押さえ付けることに成功する。

「今のうちに撤退を!!」

南雲は錬成でベヒモスを拘束しながらメルドに自身が考えた、この場で全員が助かる唯一の策を伝え撤退を促す。メルドは一瞬、南雲一人に背負わせるにはあまりに大きなりスクに顔を顰めるが、南雲の目を見たメルドは決心する。

「まさか、お前さんに命を預けることになるとはな。……必ず助けてやる。だから…頼んだぞ!」

「はい!」

メルドはそう言うと、周りの騎士達に向けて指示を出し撤退して行く。天之河も流石に状況を理解し、背後にいるトラウムソルジャーを一部を殲滅し、恐慌に陥る生徒たちを鼓舞する。すると生徒たちにちよつとばかりの余裕が生まれ、冷静になり次々とトラウムソルジャーを駆逐していく。

「クウ…ッ!!まだ早い…!!もう少し…!!」

錬成で押さえつけられているベヒモスだが、やはりかつて最強と謳われた冒険者を容易く葬った魔物、すぐに変形し取り囲む石畳から抜け出そうと暴れ始める。一挙一動に連続で錬成を強いられ、膨大な魔力が一気に吹き飛んでいく。魔力を回復するポーシヨンを使っているがもう既に焼け石に水の状態。

後ろでは未だトラウムソルジャーを突破出来ずにいる。このままではベヒモスは脱出し、ここにいる皆が殺されてしまうだろう。

このままでは…だ。

「オラアッ!!」

先程吹き飛ばされた承太郎が戻ってきたのだ。ベヒモスの錬成から抜け出していた頭部を力一杯殴り、錬成の沼に埋め込む。

「オラオラオラオラオラアッ!!」

ベヒモスが拳動を起こす度に殴り付け、錬成からの脱出を許さない。このお陰で南雲の錬成にかける魔力が減り、魔力の残量を維持しながらベヒモスの足止めを出来るようになった。

「全員退避完了ッ!!撤退しろッ!!」

背後からメルドの叫び声が聞こえる。それと同時に全ての魔力を使いベヒモスを拘束する。魔力を枯渇してしまい南雲は動けなくなるが、承太郎が南雲を担ぎすぐに撤退を始める。

「ごめん…ありがとう…」

「口を閉じてな。舌噛むぞ」

承太郎たちがベヒモスから離れて数秒後、背後でベヒモスが錬成から抜け出し、怒りの咆哮を上げながら承太郎たちを追いかけようと四肢に力を溜めた。

だが次の瞬間、あらゆる属性の攻撃魔法が殺到した。夜空を流れる彗星の如く、色とりどりの魔法がベヒモスを打ち据える。ダメージは一切受けていないようだが、しっかりと足止めにはなっている。

「チッ…!!」

承太郎が舌打ちした。次の瞬間、逃げ切れると頬を緩めた南雲の表情は凍り付いた。

無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。

行き先はベヒモスから…承太郎達へ…

「オラアッ!!」

承太郎がスタープラチナの拳で火球を弾くが、それはその場で爆発し、爆風で承太郎の身体は宙に投げ出され後退する。受け身を取りながら着地した承太郎だが、後ろから迫るベヒモスと、前方から迫る無限湧きのトラウムソルジャーにため息を吐きながら呟いた。

「やれやれだぜ…」

承太郎のそんな声が聞こえた瞬間、南雲は宙に放り出されていた。

魔法の弾幕と大量のトラウムソルジャーのちようど隙間の低空に承太郎は南雲を放り投げたのだ。

「う、うわあああああああッ!!!」

悲鳴を上げる南雲。当然である。それをメルドがある程度衝撃を弱めながらキャッチし、それを白崎が治療する。

「大丈夫!?南雲くん!!」

「大丈夫!!だけど空条くんが!!」

橋の上では迫りくるトラウムソルジャーを倒しながら撤退する承太郎の姿が。魔法の弾幕も、魔力を使い切ったのか数を減らし既にベヒモスの足止めとして全く機能していない。

ベヒモスが跳び上がり、赤熟化した額で承太郎に突進する。承太郎をそれを回避するが、ベヒモスの突進は橋に直撃し、大きな音を立てながら崩壊していく。

承太郎は崩れゆく橋から一刻も早く避難しようとするが、崩れゆく足場を踏む瞬間、足をトラウムソルジャーに掴まれてしまい、足を踏み外す。

先程あれだけ猛威を振るったベヒモスも、悲鳴のような断末魔を上げながら奈落へと落ちて行く。当然、飛行手段を持たない承太郎も同じだった。足を掴んでいたトラウムソルジャーはすぐに始末した承太郎だが、そこから何か出来ると言うわけでもなく、奈落へと姿を消していった。

「僕が空条くんを…僕の策が空条くんを殺した…」

▽▽▽

目を覚ますとそこは天井があった。ただし白い天井ではなく、洞窟の岩の天井だ。ああ、俺は橋から落ちたのか…

ひとまずその場で立ち上がり身体を解す。バキバキと音が鳴る。自然治癒が発動している筈だがまだ痛みが残っていることからかなり重傷だったのだろう。

さて、俺はどこまで落ちた？橋からでは下の様子が一切見えない程の高さ。そんな高さから落ちたら例え水の上だろうが身体はバラバラになるだろう。しかしなっていないということは運良く横穴に入り込み助かった…ということだろうか…。

取り敢えずスタープラチナの指パッチンで火種を作り、近くに落ちていた魔物の死体を燃やす。水の上に落ちた事で体がびしょ濡れ、このままでは風邪を引いてしまう。こんな状況での風邪は死の宣告と同様だ。異臭が凄まじいことになっているが我慢し暖を取る。

担いでいたバッグを漁り、無事なものを確認していく。ポーションは殆どが割れ使い物にならなくなり、タバコは水没し、町で買った魔道具も壊れていた。無事だったのは少量のポーションと携帯食料のみ。これは早めに上へ戻らねば飢え死にしよう。

しばらく暖をとっていると、服は乾き腹が鳴る。携帯食料を軽く腹に入れ立ち上がる。オルクス大迷宮から脱出だ!!

と気合いを入れ直したはいいものの出口が見つからない。まだまだ軽く見て回ったばかりだが、食料となるものも見当たらない。強い

て言えば最初の場所の水、そこにいた異形の魚ぐらいだろうか。食べられるのか？

探索を続けていると、この階層での初となる魔物と遭遇する。見た目は小さな白兔だ。見た目は全然弱そうだがかなり深層の魔物、油断はできない。

「がッ…!？」

突如腹に鈍痛が走る。俺は後方に吹き飛ばされ、口から肺の空気と血を吐き出す。何が起った!?何も見えなかったぞ!?

先程俺がいた場所を見れば、そこには蹴り終えた態勢で俺を嘲笑うかのように見ている兔の姿が。まさか奴が…!!

「スタープラチナッ!!」

俺がスタープラチナを出すのと同時に兔も駆ける。スタープラチナの拳は迫る兔を吹き飛ばさんと殴りつけるが、兔は一步も引かず拮抗する。

「互角だと!？」

スタープラチナは連続で兔に連打を喰らわせるが、兔は両足をバタバタと動かすことでスタープラチナの連打を全て相殺する。

「…ッ!!流星刺突ッ!!」

拳と足が衝突した瞬間、指を伸ばし兔を串刺しにする。不意をついた一撃だったため、これが外れていれば敗北していただろう。絶命した兔を放り投げようと腕を振るった瞬間、脇腹に先程と同じ鈍痛が走る。

横に一体…ッ!潜んでやがったか!!くそ、肋が折れたか…!?

スタープラチナの弱点、それは他と戦っている時に本体がガラ空きになるところだ。スタープラチナを俺が纏えていれば、今の奇襲もこれほどダメージが入ることはなかっただろう。

すぐにスタープラチナを前に出し、ポーシオンを煽り構える。

………兔の様子がおかしい。震えて…いる…ッ!?

背筋にゾワツと悪寒が走る。すぐさまその場から前方へハンターよろしく前転回避するが、背後からの一撃は胸元を大きく抉る。

「ぬう…!!」

切り裂かれた胸元を押しさえるが、ドクドクと流れる血は収まらない。先程まで俺がいた場所には大きな熊のような見た目をした、爪の長い魔物が、涎を垂らしながら俺を見据えていた。

や、やばい!!このままじゃあ…死ぬ!!!

魔物は腕を俺に向けて…振り下ろした。

会合

思った以上に深傷を負った。なんとかあの爪の魔物から逃げることに成功したが、胸元は切り裂かれ、今にも出血で朦朧とし意識を失いそう。壁を壊し、そこから穴を掘り安全地帯を作りなんとか生きながらえた俺は、持っていた回復ポーションを一つ飲み込む。

少し痛みは和らぐのを感じる。本来なら今あるポーション全てを使っても足りないぐらいだが、技能の自然治癒があるため問題は無い。徐々に傷が治っていつているのはそのお陰だろう。魔力を消費すればかなりの速度で回復するため、魔力を限界まで込めて傷を治療する。

そして傷が大分回復し、考える余裕が出来てから、あの橋での光景を思い出す。あの突如曲がった魔法。あれには確実に悪意が込められていた。事故じゃない、明確な殺意を持って繰り出された。おおよそ犯人は特定出来るがいかんせん証拠がない。俺と南雲に殺意を向ける奴など、考えなくてもすぐにわかる。

さて、今はそんなことよりも今後どうするかだ。少し掘ると、水が湧き出たため水には困らない。近くに俺が落ちた川のようなものがあったおかげだろう。そして食料は手持ちの携帯食料が少し、先程川で取った異形の魚ぐらいだ。量が少ない。早急に食料確保に動かなければ飢え死にしまうだろう。

傷を最短で癒したため、残り魔力は僅か、しばらくロクに動けそうもない。ひとまず回復するまで待つとして、その後にはこの階層のマッピングに上へ上がるための階段探し、そして食料確保の三つだ。

俺がいなくなった後のクラスの連中の顔を想像する。初めての身近な人間の死に、これが創作物でも夢でもなく現実なのだと思き付けられた者、邪魔な奴がいなくなったと喜ぶ者、自身の力の無さに嘆く者：様々だろう。だが、正直今の俺にとって全てどうでもいいことだ。

承太郎の記憶にも、俺が憑依してからの生活でも、思い入れのある

者はクラスの中に存在しない。

この体は借り物だ。俺の不注意のせいで死んでしまうなどあつてはならない。無事に日本に帰り、俺は承太郎へと体を返す。俺ではこれから彼に迫り来るかもしれない脅威に対抗出来ない。DIOに対抗するのはジョースターの血統、黄金の精神を受け継ぐ者達にしか出来ないのだから：

その後、俺がどうなるかはわからない。元の体に戻るかもしれないし、消えて無くなる可能性だつて無くはない。怖くないかと問われれば迷わず答える。怖い、と。

しかしそれでも：俺が目覚めた時に微笑みかけてきた母親、ジャンプを買う際に付き従ってきた、承太郎を憧憬する自称舎弟。その他にも、その他にも、全ては当たり前だが俺ではなく、承太郎に向けてのもの。この世界に、俺のいる場所など何処にもないのだ。



いつの間にか寝ていたようだ。魔力も溜まり、傷は全快した。早速探索を開始する。脳内で簡単なマップを構築しながら、上層へと上がる階段を探す。

次々と兎、狼の魔物が俺を見つけるなり襲いかかって来る。兎は変則的な動きで俺を翻弄し、鋭く重い一撃を叩き込んでくる。狼はそこまで強く無かったが、群れで襲いかかってくるため、対処がかなり難しい。やはり深層、どの魔物も油断をすれば一瞬で殺されるだろう。それほど俺と魔物のステータスに差があるということだ。スタープラチナがいなければ、とつくの昔に死んでいただろう。

爪の魔物には絶対に近付かないように行動する。あれはまだ勝て

やれだぜ。結局ハードな方を行かなきゃならないってのは気が滅入りそうだ。

ここから早く脱出する為にも、明日にでもここから下層へと降りようと思っている。しかしその前に俺としてはやっときゃなきゃならん事がある。

それはリベンジだ。下層へ行く為、戦う必要性は無いのだが、ここで奴を倒せなければ、この先出て来る強大な魔物に太刀打ち出来ないだろうからな。

奴の誘き寄せ方は非常に簡単だ。適当に威圧を発動しておけば勝手に出てくる。ほうら来た。

爪の魔物は俺を見つけるなり、雄叫びを上げ、涎を垂らしながら襲い掛かる。魔物の巨軀から繰り出される腕の振り落とし。後ろに下がれば、不可視の斬撃が飛んでくるため安易に避けるのはマズい。

よって…

「オラアッ!!」

打ち返す!!素手で、魔物の爪が当たらない角度で腕を殴り打ち返す。そして出来た一瞬の硬直時間にスタープラチナを魔物の土手っ腹に打ち込む。

「オラオラオラオラアア!!」

「グルウアアアアアッ!?!」

魔物は苦しげに悲鳴を上げ、すぐさま俺から距離を取るように後ろへと殴られた衝撃を利用し下がる。追撃を仕掛けようとしたが、そうはさせまいと魔物はガムシヤラに腕を振り上げ不可視の斬撃を飛ばした事で阻止される。飛んできた不可視の斬撃は、スタープラチナと視界を共有し、僅かな空間の歪みを見切り、全て回避する。

魔物と一旦距離を取り見つめ合う。

「テメー、思ったよりステータスは高くねえな。脅威なのはその不可視の攻撃だけ…力もスピードも全部上回っちゃったな」

「グルアアアアアアアア!!」

魔物は馬鹿にされキレた…言葉が分かるのだろうか?怒気を身に纏いながら、先程と同じようにブンブンとやたらめったらに腕を振り

あれから50階層程下った……

あれから進歩なし。降りても降りても何も無い。ただただ魔物が強くなるばかりで何も起きなかった。というか資料にやオルクス大迷宮は100階層ほどって載ってたんだがありやガセだな。確実に100階層は超えている。先程の階層で取れたきのみを頬張りながら迷宮を進む。

落ちてから何日経っただろうか。南雲が奴に何もされてなけりやいいが：流石にあそこまで大胆に動いたんだ。少しは慎重に奴も動いていると思いたい。

その階層も前階層と同じように、トラップに四苦八苦しながらも魔物を蹴散らし進んでいると、傍に二つの巨大な像が鎮座した両開きの扉を見つけた。扉には二つの凹凸があり、押しても引いてもびくとも動かない。

怪しい：これまでにこんな扉など見なかった。明らかに変化、ということはこの階層が最終階層なのだろうか。明らかに雰囲気かボス部屋だもの。

魔力を込めて見ると、静電気が走ったようにビリツと痺れ、ゴゴゴと地響きを起こしながら、傍の二対の巨大な像が動き出す。

「オラアツ!!」
先手必勝、巨人は壁に埋もれるように配置されていた為、完全に壁から出るのに時間がかかる。その隙をつき、一体の巨人の頭を粉碎する。

「オオオオオオオオ!!」
仲間を登場シーンで殺された仲間への嘆きか、またまた俺への怒りかはわからないが、俺を睨みつけながら吠えながら踏み潰さんと脚を大きく振り上げる。それと同じタイミングで軸となっていた反対の脚を殴り巨人を転倒させる。

「チェックメイト：というやつだぜ。オラアツ!!」
スタープラチナの拳が転倒した巨人の心臓位置を貫き、巨人は力尽きる。

2体を倒したことで扉が開く：：と思いきや開かない。扉の凹凸を

もつと調べてみると、2体の巨人の魔石がピツタシ収まることに気付いた。さつそくトラップに注意しながら魔石をはめてみると、魔石から赤黒い魔力光が迸り、パキヤンという何かが割れるような音と共に光が収まった。

扉を開けて中へと踏み込む。中は暗闇で何も見えない。スタープラチナの指パツチンで火を起こし、松明に火をつけ、部屋に投げける。するとスタープラチナの視力を介して中央に何かがある事に気付いた。

「……だれ？」

その何かから発せられたと理解するのに数秒、幼い少女のような声だ。こんな階層に人が？警戒しながらも対象に近づく。

そこには少女がいた。

焦点が朧げな血を思わせる赤い瞳、黄金色の頭髮、透き通るような白い肌、子供とは思えないような妖しい色気……

まるでジョースターの運命と言うべきか、そこには「彼」を彷彿とさせる少女が何かに埋め込まれるかのように存在していた。

「DIO……まさかの女体化か……？」

「……？」

少女は首を傾げた。

封じられし女王

「……？」

D I Oの女体化か、と疑問に思っている俺を見て、可愛らしく首を傾げる少女。悪の化身であるD I Oの女体化：俺が承太郎に憑依して転移したということを考えればその可能性はなくはない。D I Oはジョジョの世界では上位の存在であり、エヒトとやらの感心を引くには十分な存在だろう。柱の男もいるが奴らは手が付けられなかったのかもしれない。無差別に人間を、吸血鬼を喰らう彼らは一種の災害のようなものだ。それに今思い出したが、承太郎が幼い頃に、ジョセフのおじいちゃんは自身の冒険譚として柱の男を語っていた。その頃の承太郎は作り話だろうと思っていたようだが…

つまりはあの世界はやはりジョジョの世界で、俺の憑依と異世界転移は完全なるイレギュラーということになる。

俺に、承太郎に別人格が憑依、その対となるD I Oの女体化。そんなイレギュラーが起こっていても不思議ではない。

「テメエは何者だ…こんな場所にいるってーことは只者じゃあねえよな？」

スタープラチナを背後に出し、警戒しながら拳を構え少女に問う。「待つて…!!私は何もしてない…私、悪くない!私…裏切られただけ!」

「…裏切られたとかはどうでもいい。今はそれを事実と確認する術がねえ。俺が聞いてんのはテメエが何者かってことだぜ」

「…ツ!?…そ、それは……」

「答えられねー…ってことか?答えられねーってんならこのまま放置していつてもいいんだぜ?なあD I O」

「待つて…!!助けて!何でもするから…!!私、先祖返りの吸血鬼…:…すごい力持つてる…そして元女王…裏切られたけど…」

泣きそうな顔で俺に助けを乞う少女。その声はもう何年も出していなかったように掠れて眩きのようだった。

少女の口調、表情、声質、心拍音、全てが彼女の心境を表すかのよ

うに必死だった。俺に助けを懇願する表情、震える声、緊張しているのか掠れて上擦った声、ドクドクと高速で脈打つ心臓。

途中会話でD I Oという言葉を出したが完全な無反応。声も心拍音も何も乱れなかった。それにもし、彼女がD I Oなのだとしたら、こうまで命乞いをするだろうか：いや、しない。D I Oは勝つ為なら手段を選ばない狡猾な一面もあるが、それ以上に頂点に君臨するとう帝王としての大きなプライドがあるはずだ。

他人に媚びるのは彼の最も嫌う行為だろう。彼が犬が嫌いだったように。

そして彼女の目の前にスタープラチナを出しているが、スタンドはまったく見えていないようだ。

なら、この少女はなんなのだろうか。彼女はD I Oと同じ吸血鬼、更には女王だ。疑問は多々ある。恐らく彼女はこの世界の吸血鬼だ。なら、ジョジョの世界の吸血鬼のように日光を浴びればどうなるのか、波紋は効くのか、D I Oと同じように何らかの方法で人間をやめたか、生まれた頃から吸血鬼だったのか……

聞きたいことは山程ある。

しかしそれは置いておいて、彼女がD I Oである可能性は限り無く低いだろう。そう認識した俺は僅かばかり、少女への警戒を緩める。その雰囲気伝わったのか、少女はあからさまにホッと安堵したような表情を浮かべている。

「……で、何故元女王がこんな深層に封印されている？それほどテーマは無能な王だったってことか？」

「違う!!私……国の為に……皆の為に頑張ったのに……家臣の皆……お前はもう必要ないって……おじ様……これからは自分が王だって……私……それでもよかった……でも、私、すごい力があるから危険だって……殺せないから……封印するって……それで……ここに……」

枯れた喉でポツリポツリと語る少女。やはりどこの世界でも出る杭は打たれるのか……と、少女の波瀾万丈な運命に同情する。彼と同じく、彼女も運命に振り回された者だったか……

「そうか……助けてと言ったな。これから質問することに嘘偽りなく答

えな。俺はここから更に下の階層に足を踏み入れる。まだここが最下層じゃあないようだからな。魔物は強さを増し、ここにいた方がマシだったと思うかもしれない。それでも…俺に助けられる。『覚悟』はあるのか?」

「…あるー」

即答だった。

「もう…私は…地獄をみた…こんな所で…1人で…孤独に生き続けるより…例え死ぬのだとしても…誰かの隣で生きて…一緒に死にたい!!」

「good、いい回答だぜ」

スタープラチナを再度顕現させ、少女を捕らえ、封印しているアーティファクトに照準を定める。

「オオオオオ!!オラアツ!!」

そして力任せに殴り付ける。硬い。金属と金属が打ち付け合うような甲高い打撃音が部屋に響き渡る。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアツ!!」

想像以上の硬度に嫌気が差す。防衛機関かはわからないが、赤い雷のようなものが、スタープラチナに襲い掛かる。飛び散った雷が俺の服を焦がすが、それを無視して殴り続ける。

「こいつがツ!!壊れるまでツ!!殴るのをやめねえツ!!オオオオオオオオオラアアアアアアアアアツ!!!」

瞬間、一筋の亀裂がアーティファクトに刻み込まれる。そこから、ピシピシと不協和音を流しながら崩れていく。ボロボロと封印していたアーティファクト全体が崩れ始め、中にいた少女がゆつくりと俺の方へ一糸纏わぬ姿で力無く倒れ込む。

軽く彼女を支えてやり、鎧の上に来ていた学ランを少女に被せる。

「ありがとう…貴方の名前…教えて…」

「空条承太郎…テメエは?」

「…名前、付けて」

「何故だ?忘れたか?」

少女はフルフルと首を振る。

「もう、前の名前はいらぬ。…承太郎が付けた名前がいい」

前、というのは女王の時の名前か。それを捨てて新たな自分と価値観で生きる。過去と決別する少女。その一歩としての名前というわけか…

なら、運命を乗り越えて欲しい。DIOのような吸血鬼としての因縁の運命ではなく、幸せを運んでくる運命へ…

名付けよう、彼女の名を。

「ステラ…ステラなんてのはどうだ」

無数に広がり輝く星のように、そんな輝かしい未来を迎えて欲しい。そんな想いを込めて…ステラ。ラテン語で星を意味する名前。

「ステラ…ステラ…ん、今日から私はステラ…ありがとう」

「おう…じゃあまあ取り敢えず…そのデカブツを倒すぜ。ステラの力、見させて貰うぜ！」

天井を見上げれば、そこには巨大な蠍の魔物が張り付き、俺たちを仕留めんと、照準を合わせ尻尾から毒針を発射する。ステラの腕を取り、バックスステップで毒針を避け構える。

「待つて…私…魔力…空っぽ…」

「……………やれやれだぜ」

蠍の魔物は俺たちに飛びかかった。

▽▽▽

時は少し遡りる。

ハイリヒ王国王宮内の一角、錬成師用の工房の中で1人、深夜遅くまで作業を続ける少年がいた。

「錬成…!!錬成…!!錬成…!!」

何度も何度も錬成の詠唱を続ける。少年の足元には大量の魔力回

復ポーションの飲み終えた空の瓶が数十と乱雑に捨てるように置かれ、さらにその周りには近代兵器、銃と思わしき物が大量に散らかつていた。

「南雲くん!!もうやめて!!南雲くんの体が…精神がもう保たない!!」

錬成を繰り返す少年は、本来ならば承太郎の代わりに落ちるはずだった南雲ハジメ。そして狂ったように錬成を続けるハジメを止めようと静止の言葉を投げかけ続ける少女は白崎香織。日本の通っていた学校で、八重樫と2大天使と称される美少女である。

「止めないで…!錬成…!!駄目だ…!こんなじゃべヒモスは倒せない…錬成、錬成!!僕に…僕に力が無かったせいで…空条くんは死んだんだ…僕のせいで…僕に力があれば…あそこで空条くんが死ぬことなんて無かったんだ…!!」

ハジメは自身が立てた作戦で、自分が助かり、承太郎が死んでしまったという事実には自責の念に駆られていた。

自分が弱かったから承太郎が死んだ。自分がもう少しべヒモスを抑えてられたら承太郎は死ななかつたかもしれない。

それに加えて檜山達に言われたことも、こうして引きこもり錬成を続ける原因であった。

『お前のせいで空条が死んだんだ!』

『あそこでお前がイキってなきや誰も死ななかつたんじゃないの?』

『これだからキモオタはな。すぐに自分が特別だかなんだが知らねーけど思い込んじゃうんだ。あーあ、キモオタのせいで1人死んだな。あとお前は何人殺すつもり?ギャハハハ!!』

そもその話、今回の転移は檜山がトラップの有無を確認せず鉾石に触れたことが事の発端であり、彼は戦犯だったのだが、それを棚に上げてハジメを責める。自身が悪いということを理解している檜山は、ハジメが一人にいるところを狙い、散々とハジメを罵倒した。

承太郎を自身の策で殺したと思い、自責の念に駆られていたハジメは、そんな罵倒を脳に受け入れてしまった。本来のハジメなら無視したか適当に流していたが、いかんせんショックが大き過ぎた。

それからというものの、ハジメはずっと工房に引き籠もり、一切休まず錬成を続けている。

「大丈夫だよ南雲くん!!私が、私が貴方を守るから!!ねえ、この前約束したでしょ!?!」

月下の語らい。オルクス大迷宮へと挑む前夜、ハジメと香織が結んだ約束。治癒師である香織に、自身を心配する香織に、少しでも安心して貰おうとハジメが結んだ『香織がハジメを守る』という約束。

「駄目だよ…!!守られてばかりじゃ駄目なんだよ!!空条くんの時のように…自分に力がないと何も守れないんだ!!白崎さんが僕を守ってくれたとしても、僕が弱いままじゃきつといつか限界が来る!!もう僕は…同郷の皆が死ぬのを見たくないんだ……」

「南雲くん……」

それはハジメの心からの叫び、吐露だ。例え自分がクラスの皆からどう思われていようと、どんな扱いをされていようと、ハジメは同郷のクラスメイト達が死ぬ姿を見たくないし、出来れば死に怯えることもして欲しくないと思っている。ハジメは優しい。香織はハジメの汗だくな背中に胸を押し当て抱擁する。

「優しいね…南雲くんは」

「ちよっ…!?!エッ!?!あの…白崎さん…!?!」

「私はね…許せないの。南雲くんはこっちに来てからもずっと、人一倍頑張ってる。でも、皆はそれを認めずに南雲くんを責め立てるの。光輝くんもそうだったでしょ?私なら、自分の努力を全部否定されたらもう正気じゃいられないと思うの。」

けど南雲くんは、気にするどころか、逆に皆の心配だなんて…本当にお人好し……」

「まあ…うん……。それが僕の性分だから……」

「知ってる…前にも言ったでしょ?私の中で一番強い人は南雲くんなんだって。あと…ごめんね。私が南雲くんを守るって言ったことが枷になってたんだよね」

「そんなこと…!?!僕からお願ひしたんだし…!!」

「いいよ。私が間違ってたの。実はね、私には確な攻撃手段がないの。」

それに、自分で言うのもなんだけど、一番重要な役割じゃない、ヒーラーって。だからきつとこれから、魔族と戦う時に真っ先に狙われると思うの。きつとそれは光輝くんや龍太郎くんに雫ちゃん、その他にも皆が守ってくれるだろうけど、まだ怖い。南雲くんは強くなりたいて言ってたよね。後方での支援じゃなくて、自分の命を投げ打つても私たちを守ろうとするでしょ。わかるよそれぐらい。ずっと見てたもん。

それでね…私を守って欲しいの」

「…え？僕が…白崎さんを…？」

「うん。私を守って欲しい。私も南雲くんを守るから。貴方は1人じゃない。だから気負いすぎないで。一緒に、2人で強くなろう」

「2人で強く…けど…」

「空条くんのことだよ…南雲くんは彼が本当に死んだと思ってるの？」

「……え？」

「わかってる。あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって。…でもね、確認したわけじゃない。可能性は1%より低いけど、確認していないのならゼロじゃない。それに、南雲くんも知ってるでしょ？空条くんがあの程度でくたばるような男じゃないって。だってあの光輝くんを正面から倒したんだよ？」

だから信じようよ、空条くんを…！」

空白の間が流れる。聞こえるのは2人の吐息のみ。ハジメは知っている。承太郎が一人で不良軍団を壊滅に追いやったことを。この世界でベヒモスとほぼ謙遜無いくらいの力を持つていたことを。ハジメは手に持っていた銃を台に置き、腰に巻きついている香織の腕を優しく解き、彼女と向き合い目を合わせながら答えた。

「わかった…信じるよ。僕じゃ力不足かもしれないけど、白崎さんを守る。一緒に…強くなろう！」

ハジメの顔は、先程と比べ少しばかり明るくなり、悩みも殆ど吹き飛んだ。ハジメは信じる。承太郎が決して死んでいないと。それを確認するためにも、もつと強くなろうと決意する。ハジメの瞳は、既

に狂気に現実逃避の色は消え失せている。

普通に考えれば、香織の言っている可能性など0%であると切って捨てていい話だ。あの奈落到ちて生存を信じるなど現実逃避と断じられるのが普通だ。

「空条くんだしね」

「そのうちひよっこり顔を出しそうだね」

ハハハッと2人で笑い合う。こうして笑ったのはいつ振りだろうか…とハジメは考える。いつも学校では寝てるだけ、家ではゲームに親の手伝い。心から笑うなんて久しぶりのことだった。

「香織って呼んで。私もハジメくんって呼ぶから」

「え、いや…それはちよつと…」

いきなりの提案に女性経験皆無、話したことも殆どないハジメはきよどるが、香織はグイグイと詰め寄る。

「か、香織…さん…」

「か・お・り！」

「わ、わかったよ…香織…」

「うん、それでよし！」

顔を赤くして頬を掻くハジメを見た香織は、心臓が高鳴るのを感じる。

「(ああ、やっぱり私はハジメくんのが…) …キャツ!? ハ、ハジメ…フツ」

「香織、南雲くんは大丈夫かし「しいー静かに」ら…」

ハジメのいる工房に入ってから、香織が中々出て来なかったため、様子を見に来た雫は、思わずその光景に頬を染めた。

ハジメは穏やかな顔で、香織の膝の上で眠っていた。グッスリと膝枕で。数日間寝ずにずっと無理して作業していたのだ。香織との会話の途中で寝落ちしたハジメは役得とばかりに香織に膝枕されたのだ。

「あの香織がもうそこまで…きつともうすぐ2人は付き合うんだわ。一緒に綺麗な夜景を見ながら、さりげなく『好きだよ』とか、南雲くんが跪いて、香織の手を取ってキスして『僕の恋人になってください』とか言われるんだわ！羨ましい…!!」

「雫ちゃんちよつとうるさいよ。というかそんな乙女チックな展開ないと思うけど…けどそんなのもいいなあ…」

香織はハジメの髪を撫でながら寝顔を覗き見る。そんな告白のシーンを思い浮かべ、顔が真っ赤になった。

〜一時間後〜

「足が痺れて…!!けどまだ…」

「そろそろ南雲くんをベッドに寝かせなさいよ…」